

---

# 異世界の女神と少年とその幼馴染

紗九

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の女神と少年とその幼馴染

### 【NZコード】

N9847Y

### 【作者名】

紗九

### 【あらすじ】

目が覚めたら湖の畔に見知らぬ美少女と二人きり。そして自分は何故か美少年と化していた。見知らぬ美少女が幼馴染の少年だと分かり、とりあえずの現実を受け止めて歩き出す二人。そして目覚める力。っていうか目覚めていた力。

チートな能力を手に入れた主人公とその幼馴染が異世界で生きていくお話です。  
たぶんB」になる予定ですが・・・

## 1 (前書き)

何となく書いてみたら続きモノだつたらしいへへ；

「朱里、おい！起きろって！」

すぐ傍らから聞こえる声は涼やかで耳に心地よい。

男勝りなその口調をもつてしても、その魅力は…？たまりとも揃な

われずに頭の中に響いている。

こんな声で起こされたつて全く起きる気はしない。

むしろずっと聞いていたいくらいだ。

「起きろっつてんだろがボケエ…！」

「ぶつ…？」

それはどんな口調になつても変わらなかつたが、顔面に水をかけられたとなれば話は別だ。

すぐさま起き上がり鼻やら口やらに入った水を排除する。むせる私を見下ろしているのは、美しいプラチナブロンドを腰の辺りまで伸ばした美少女だつた。

宝石のような見事なブルーの瞳は怒りに満ちており、寝ている人間の顔に水をかけるという悪魔の所業をやつてのけた犯人は彼女だと分かる。

それでも、こちらが怒る気にならないくらい彼女は美しかつた。

同性の私から見てもそうなのだから、異性など彼女に触れることすらはばかられるのではないだろうか。

「お前朱里だよな」

「え？何で知つて、るんですか？」

思わず遣い慣れない敬語が出てしまう程美しい。

とにかく美しいとしか言ひようがない少女は、突然私の首根っこをつかむと引きずつて傍らの湖に顔を押し付けた。

いじめられているかの様だが抵抗する気も起きない。

だつて本当に…・・・

「なつ…・・・！？」

水面手前で停止させられた私が見たのは水面に反射する自分の顔。ただし、今の今まで筆舌に尽くしがたいほどの美しさだと褒めたえ続けた彼の美少女そつくりの顔だった。

多少丸みがない所を見ると男のようだ。

一番の違いは髪の色だが。

光り輝く銀色の髪が美しい少女とは違い、顔の横から流れてくる髪は今までの髪色と同じく鳥の羽のような黒だった。

鳥だなんて水面に映る彼に對して失礼極まりないが、とにかく違う。

首から手を放してくれていた美少女を見上げれば、美少女の目に涙がたまっていた。

つられて私の目にも涙がたまる。

「オレだ。アキラだよ」

「な、んで・・・私たち」

何が起きたのかはさっぱり分からなかつたが、とにかく今の状態は夢ではなかつた。

泣いて泣いて、泣き疲れて眠つても、翌朝目が覚めたのは同じ湖の畔だつたのだから。

## 1（後書き）

どれだけ続くかは未定ですが、何となく終わりは決めてるので最後まで書けるようがんばります。

幼馴染と言つても、赤ちゃんの頃から兄弟の様に育つたとかいうわけではない。

ただ近所に住んでいて、幼い頃は確かによく一緒に遊んでいたが、それもせいぜい中学生まで。

高校に上がり学校が分かれてからは、会えば笑つて話すが、積極的に休日を共に過ごすような友人ではなくなつていた。

そんな幼馴染の部屋に上がつたのは三年ぶりくらいだつたらうか。そうして気づいた時にはここに居た。

見たことが無いほど自然な自然。

清らかな水をたたえる湖。

草木も花ものびのびとしていて空気がきれいだった。

「はは、体中いてえな」

「アキラ目腫れてる」

こんな地面で直接寝つてしまえばそつなるに決まつていた。

泣いたまま、顔も洗わなかつたアキラの顔もひどかつたが、私も同じようなものだつた。

顔を洗おうと覗き込んだ水面にはそんな顔の美少年が映りこんでいた。

「・・・とりあえず歩くか

「そうだね」

湖の周りを囲んでいるのは多くの木々。

森の中の湖と言つたところだろう。

その湖につながる道は一本あつた。

私たちは、一本の内自分たちに近い方の道を歩き出した。どちらでもよかつたのだ。

目的なんて生きることだけしかないのだから。

どれだけ歩いたのか、太陽が真上に来た頃に、森の空気が一変し

た。

「アキラ！」

「どうした！？」

小柄になってしまったアキラを肩に軽々抱ぎ上げて走り出す。  
嫌な視線を感じた。

こうしなければいけないと思ったのだ。

「シリ！ 後ろ！」

「分かつてる」

強盗かもしれない。

先回りされているかとも思ったが、それでも走った結果、その先  
回りさえかわすことができた。

逃げ切れるかと思ったとき、背後から聞こえてきたのは馬の蹄の  
音だった。

「なっ！ なんなんだよ！」

どこの牧場から逃げてきたのかと思つような生き物だが、その上  
には人が乗っていた。

「待ちなさい！ 君、もう大丈夫だから！」

前に回りこまれ、森の中に逃げ込もうとしたところ、黒馬に乗つ  
ているのが先ほどの連中とは違つことに気が付いた。

「シリ、逃げなくていいのかよ」

「・・・この人は大丈夫」

この状況で受け入れるのは残念だが、やはり私たちの現状はおか  
しい。

私たちの容姿についてもそうだが、目の前の男性もそう。  
アキラと同じプラチナブロンドに、薄紫の水晶のような瞳。  
神様が手ずから作り出した芸術品のような造形だというところも  
アキラと同じだ。

「怪我はないか？」

男になつた私よりも背が高くてかっこいい。

王子様のような人だ。

少し頼りなさそうなところがむしろいい。

なんて考えはおぐびにも出さず、女になつたアキラを背後にかいながら青年に対峙する。

「驚かせてすまない。部下がそちらの御嬢さんを探し人と間違えたようだ」

私に對して話している青年は、馬を下りると申し訳なさそうに膝をついて私の手を取つた。

「こんなか弱い女性を追い回すなんて、申し訳ないことをした」

そして最終的にはやるんじゃないかと思つたが、人の手の甲に顔を押し付けた。

こんな風習、日本どこのか外国にだつて今時ないだらう。  
やはりこには違つんじやないだらうか。

「なつ、なつ・・・・・！」

口づけられた本人よりも、背後に隠していたアキラの方が焦りだして訳の分からぬことを口走り始めている。

「すみません、これでもオレ男なんです」

よく考えてみればそうだと思いつき、言つてみると青年は目を丸くしていた。

こちらも最初は驚いたが、一回尿意をもよおしてしまえばどうしようもない。

アキラにやり方なんか聞きながら、どうにかいつにかし終えたのだ。

大変だったが、あれさえ乗り越えればもう怖いものはない。  
これでも私はもう男なのだから。

「・・・・」

「それでは、先を急ぎますので、失礼します」

呆ける青年をそのままにして、私はアキラとその場を離れた。

「・・・何だ、今の」

「思つたんだけどさ」

人前でもないし、間違つても手なんか繋いでいないが、先ほどの

「」とがあつてアキラの服の裾を放すことはできなかつた。

その状態で森の中の道を進む。

「」、「異世界つてやつじやない？」

「パラレルワールドとかか？」

「タイムスリップよりは近そだと思つて」

「」  
ファイクションのファンタジーなお話の中の出来事でしか知らない。  
現実に起こりうるなんて誰も思つちゃいない。

だけどここには知らない自分が居て、知らない文化があつた。

「さつきの人もなんか王子様みたいだつたし、黒いけど馬乗つてた  
し、剣まで持つてたし」

「・・・ああいうのが理想？」

「」、「」  
が異世界なら許すけど

現実あの格好で現れたらもちろん引く。  
それは自分たちでも同じだらうが。

やつとたゞり着いた人がいるといふ。

王子っぽい人と別れてからその日の内にその町に着くことができた。

「・・・」

思った通り、そこに車は走っていなかつた。

日本人も居ない。

それでも話が通じるのだから不思議ではある。

ヨーロッパの田舎町、という感じ。

建物は立派だし、村とは言えないだろうと思つ。

町の中に川があつて、女性たちがそこで洗濯物を洗つていたりもする。

町の入口には立派なアーチが設えてあり、町中の道路は馬でも馬車でもものともしない石畳で舗装されている。

そういうテーマパークがあつてもここまで細かく再現は出来ないはずだといつところまでリアルだった。

町の中を歩いてしまえば、アキラも納得せざるを得ない。

「困つたな」

「どうする？ お金も何もないんだけど」

身に着けている物なんて自分たちの服だけで、装飾品一つ身に着けていない。

「モンスターでも倒せればお金稼いだりできるのかな？」

「ゲームじゃねえんだからんなことができるかよ」

アキラはそう言つたが、私はそうでもない。

「たぶんできる。なんか私、ゲームで言つどひの「→・MAXな気がするんだよねえ」

「何だそりや？」

「『グラン・ド・グラン』」

何を言つても理解はしてもらえないだろ？。

そう思い、実際に手の中に魔法を出した。

「・・・何だよソレ」

「グラン・ド・グランっていう魔道書、らしいよ？」

私にだって分からることはある。

出てきた魔導書は古めかしいが高そうな装丁の本だった。

そしてそれは手の支えもなく宙に浮いている。

「何か、最初からこの世界の知識がある程度頭の中にあるような気がするんだよねえ」

「オレにはねえ」

アキラはそう言つたが、そんなことはないだろ？。

「じゃああの看板、読める？」

田の前の建物の入口に掲げられた看板を指さす。

「ホーミヤの宿屋」

普通に読んでくれてしまつた。

それが何だよって顔で見上げてくる顔がまた可愛い。

「うん、じゃあ何語で書いてあると想ひつ？」

「!?

そこでやつと氣が付いたらしく。

無意識に読み上げた文字はひらがなでもカタカナでも漢字でもない。

もつと言えば英語でも中国語でもフランス語でもスペイン語でも・

・とにかく地球上の国で使われてきた文字ではない。

「何だりや・・・」

「この国の文字だらうね。ちなみにこの本は古代語で書かれてるらしいから、アキラ読める？」

「読めん・・・」

本の適当なページを開いて見せるがアキラには読めなかつた。

そんなんじゃないかと思つた。

「私とアキラの中の情報量が違うみたいだねえ」「

「なんでお前魔法なんていきなり使えるんだよ」

「それだけじゃなくってさ、コレ、かなり高位の魔道書らしいし、

たぶん剣も使える」

「だから何でだよ」

「わかんないよ。頭の中が勝手にそういうんだから」「魔道書の目的のページを開く。

そして知っているやり方で本に魔力を込める。

すると本の中から剣の柄が生えた。

それを掴んで本から抜き取る。

「さっきやろうかと思つたんだけビタ、いきなり思いついたから混乱して逃げちゃった」

この召喚っぽい魔法は、魔道書を極めると使える必殺技みたいなモノらしい。

「な、なんでお前だけなんだよーー！」

「いいじやん。これからちゃんと教えてあげるし」

「お前だけ最初からマスタークラスってひでえーー！」

そう言われてもなりたくてなつたわけじゃないのだが。

「これで、ますます私は男に近づいて、アキラは女に近づいたんだね···」

「う···」

そんな力を手に入れた中で、私たちは割と簡単にこの世界を受け入れた。

そうなるように頭の中の情報が書き換えられていたのかも知れないが。

### 3 (後書き)

「都合主義ひんと來いーなお話です。そして説明へへ；  
せひじまばー」と言つておいてそれっぽい要素がない・・・

魔法と剣以外にも、私にできてアキラにできないことは山ほどあつた。

まず今までお世話になつてこなかつたスキルはほとんどがそうだ。料理に乗馬に狩猟に野宿に、あとは飲酒。この世界では飲酒に年齢制限はなかつた。

そのため、私もアキラもアルコールに興味津々。

しかし、この容姿で一人して酔つぱらつたらこの世界ではどうなることが予想がつかないわけでもない。

私は控えるようにしていたのだが、アキラはアルコール度数の低いプランティーの水割りのような酒でもグラス一杯で酔つぱらう。対する私は、アキラの田を盗んで一人で飲みに出て試してみたが、底がなかつた。

その上翌日に何も残さない。

正にワクだつた。

「・・・なんかシユリに世話かけっぱなしだな」

「いいよそんなこと。何かできちやうだけだし」

そう言つて野宿するたき火を囲い、保存食の干し肉や固いパンをかじる。

「それに、私人と話すの未だに慣れないから、アキラが色々交渉してくれて助かつてるよ」

アキラにてきて私にできることもある。

それが今言つた話だ。

「自慢になんねえよ・・・」

未だに一人称をオレと僕のどちらにするべきか迷つている私のだが、アキラは既に女性らしい立ち居振る舞いをマスターしていた。今や人前に出れどどこから見ても美少女だ。話しかけではない。

食べ方や歩き方、話し方に笑い方までもがとにかくかわいらしい。二人きりの時に聞くガサツな男口調の方が違和感があるのは最初からだが、アキラが可愛らしく笑えば、微笑みかけられた人と一緒に見とれるくらいに馴染んでいる。

「私は何も努力してないし。がんばんないとねえ」

「お前はソレ以上すごくななんよ」

「アキラもこれ以上女の子らしくなると困るよ」

「本人だつてやりたくてやつていることではない。  
だから嫌そうな顔をした。

「ほつとけ」

「こないだだつて双子に見えないって言われちゃつたしねえ」  
髪の色の違いだけで、歳にも差があるようには見えないため、私たちは双子という設定で旅をしている。

「それはお前がでけえからだろ」

「そうかな？アキラがかわいすぎるからだと思つうけど

男女なのだから身長に差ができるのは当たり前だ。

アキラの女の子らしさのせいでの、私以上に可愛さが際立つてしまつているせいだと思うのだが。

しかし、今まで出会つてきた人々には双子だと名乗つてしまつた手前、今更えることはできない。

中には同じ旅人も居たし、この兄妹のこととはそう簡単には忘れられないはずだから。

「そろそろ王都だねえ」

最初の町でそろえた荷物の中から地図を取り出し、たき火の横に開いて見せた。

「今日は・・・ここから辺だろ」

「そうだねえ」

ここから東に見える川を渡れば後は王都まで一直線だ。

ただし、渡つてから馬で半日以上の行程を経て、という話だが。  
そもそも私たちが王都に向かうことには理由はない。

見てみたい、といつのが一番の理由かも知れない。  
この世界で生きることを決めた私たちは、生きる場所を求めてい  
る。

職と住む場所を探している。

その中で王都に寄ることだけは決めている、といつ話だ。  
王都観光が終われば、再び永住の地を求めてさすらひ。  
まあ、王都がいい場所だと思えばそこで永住するつもりはあるの  
だが。

「アキラって何かやりたい仕事あるの？」

「さあ・・・シリは？」

「わかんない。仕事内容より職場環境、かなあ  
やりたいことはないが、働きやすい場所がいい。  
その方がきっと楽しいに決まっているのだから。

川を渡る所を襲われたらしい。

昨夜の内から目的地にたどり着くためには渡らなければならぬ川があることは分かつていた。

その場所も決めていた。

川幅が細くて浅い場所だ。

しかし、目前の一団はそこで襲われていた。

「アキラ、しつかりつかまつててよ」

「分かつてる」

これから自分たちがその場所を通るといふところだ。  
見ないフリはできない。

「『グランドグラン』」

左手で手綱とアキラを支え、右手に魔道書を出現させた。馬で川岸まで近づいて、見下ろす形で確認する。

その間に既に目的のページは開いておいた。

「九本の光の矢『シャイニー・アロー』」

本を頭上に掲げ、詠唱と共に振りおろした。

ホーミングの付いた光の矢は狙い通りに九人の体を貫いた。九人がかりで襲っていたのはたつたの三人。

「君たちは」

助けてから気が付いた、川の中で馬から落ちていたのはいつかの氣障な青年だつた。

あのときは気が付かなかつたが、あの作法はこの世界でも一般的ではなかつたのだつた。

「お久しぶりです」

川まで下りて襲われていた三人の元まで近づいた。

「怪我はありませんか？」

「ああ・・・君たちは魔道師だつたのか」

否定はしないが肯定もできない。

アキラは自ら馬を降りて川に倒れた彼の黒馬を見ている。

「『ラーナーリン』」

アキラに買い与えた魔道書は初級の回復術の魔道書だ。

馬に回復術を施したアキラがこちらに戻ってきたので引き上げようとしたら、青年がアキラを抱き上げて私の前に乗せてくれた。

「一度も助けられたな。本当にありがとう」

「いえ、お怪我がないなら良かったです」

今の魔法で怪我なんて負わせたら元も子もない。

「そちらの方は・・・」

「先日『一クスの南の森で少女二人を追い回したことがあつたろう」「まさかそのお二人が・・・」

そのはずなのだが、あの時はもっと人数が居たはずだ。

「先日は失礼した。今回の事も含めて礼がしたいのだが、名を教えてはもらえないだろうか?」

どうやら青年は偉い人らしかった。

年上らしい従者が居ることから、貴族か何かだろう。

ここで名乗らないのもおかしいし、名乗つて困ることもない。

「私はシユリ、こちらは双子の妹のアキラです」

「私はファルキオ・F・シリルヴァンティアだ」

そうですか、なんて相槌を打ちかけたが、腕の中のアキラの様子がおかしい。

焦つたようにこちらを見上げて拳銃不審に青年と私を交互に見つめている。

「こ、この人・・・」

「え?」

「殿下! ? ご無事ですか! ?」

王都のある方角から現れたのは馬ではない謎の生き物に乗った、これもまた目の保養になる美青年だった。

足もとに雲を纏つた馬と竜のキメラみたいな生き物から飛び降り

ると、濡れるのも厭わずに青年の足元にひざまづく。

元から居た二人も彼に傲い頭をたれる。

あんまりな光景にどうしたらいいのか分からなかつたが、アキラが衝撃的なことを言つてくれた。

「王子様だ、この人」

それっぽいなあ、とは思つていたが、それが真実だと聞かされるとクラッときた。

「危ない！」

それを律儀に支えてくれぢやう王子様。アップで見ても綺麗な顔だつた。

生き物じやないみたい。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫です・・・」

この世界に来て2日目で既に王子と遭遇していったということだ。しかも今回はそんな王子の命を救つてしまつたような気がする。

「そちらの方々は？」

「私の命の恩人だ。礼を尽くしてもてなしてくれ」

そんなこと頼んでないのに。

「かしこまりました」

そう言つた青年の目がこちらに向いたが、その目に感情らしいものはなかつた。

案内されたのは予想通りの場所だった。

さすが王子だというだけあり、通されたのは城の一室。

「なんかとんでもない場所に来たな・・・」

「やだなあ。バレなきゃいいけど」

中身と容姿が一致しないというのは裏表が激しいと同義だろうか。  
どのみち正常だとは思われないだろう。

アキラの女のフリはそんな心配を必要としないクオリティに達しているのだが、問題はやはり自分のことだ。

「お前、オレと話してる時も素になるの止める」

「そんな露骨に女言葉使ってないと思うけどなあ」

「せめて一人称は“オレ”にしろ。決定な」

「そう言われただけで実行可能なわけではない。

今までだつて努力してきたのだから。

そこにきて突然のノックに、素で話していたアキラが飛び上がる  
程驚いていた。

「はい」

「失礼致します」

ドアを開けて丁寧にお辞儀をしたのは、先ほど川まで王子様を出迎えに来た青年だつた。

王子の騎士だといつ割に鎧を着ているわけでもない彼はライナーさんというそうだ。

彼の夕焼け空のような朱色の髪は、この世界でも今まで田にしたことがない程美しい。

その髪色に目を奪われていた私を、顔を上げたライナーさんの翠の瞳が鋭く射抜く。

「シリ殿、でしたね」

「あ、はい」

彼は明らかに私だけに敵意を向けている。

訳が分からずアキラの方を見るが、女の子らしく首をかしげるだけだった。

「何が目的ですか？」

「一度も王子に近づいたのは確かに不自然だろう。

それが分かつていながら、何故彼らは私たちを城へ招いたのか。というか、どうしてアキラにはその敵意を向けないのだ。

はつきりと、窓辺に立つアキラからは視線を外し、ソファから立ち上がった私を睨みつけてるのはそういうことだろう。

「別に王子とお近づきになるうとしたわけでは・・・」

「一度も王子に接触しておいて、そんなはずがないでしょう」

「では、ライナー様はわたくし達があのまま見て見ぬフリをしていた方が良かつたというのですか？」

若干うすら寒い言い回しだが、さすがアキラだ。

私にはできない。

「アキラ殿は知らずとも、あなたには目的があつたのでしょうか？」

「なんでオレだけ・・・」

そこまで疑われる理由が分からず、力なく呟いた言葉にライナーさんの目が点になる。

「・・・オレ？」

「？」

ライナーさんが驚いているのは分かった。

今まで威圧感たっぷりに睨まれていた目が逸らされ、何故かすがるようになアキラを見ている。

「・・・シユリはわたくしの双子の兄ですが」

そう言われてからやっと理解できた。

ライナーさんは私のことを女だと思っていたのだ。

そして、先ほどまでの話の流れから推測するに

「もしかして、オレが王子様を誘惑しようとしてると思ったとか・・・

・？」

「つー？ですが、実際に王子はあなたの」とばかり・・・

しかし、王子様は私が男だということを知っているはずなのだが。

「殿下は同性がお好きとか・・・」

「そ、そんなはずは・・・」

アキラの言葉にライナーさんも否定しきれずに頃垂れてしまった。

「本当に、男性なのですか？」

「女っぽいと言われることはあります、そんなに間違えられたことはないんですけど・・・」

ここまで旅する間にも、からかわれて御嬢さん扱いされたことはあるが、真剣に女扱いしてきたのは王子様とライナーさんの一人だけだ。

「普通に男です」

「よね・・・」

豪奢な内装の密室に通され、立派な身なりをした青年に深く謝罪されるような、どうしてこんなことになつたのか。

ライナーはひたすら謝罪の言葉を口にし、王子の異常な性癖疑惑について何故かアキラと一緒に慰めの言葉をかけた。

「きっと兄に命を救われ、憧れていらっしゃるだけなのではござりませんか？」

こうして会話を聞いていると、彼女は本当にアキラなのかと思わずにはいられない。

「どこでそんな言葉遣いを覚えて来たのや！」

「そうだといいのですが・・・」

「そうですよ。だって・・・」

私だって慰めている場合ではないのだ。

確かにあんな美形に好意を持たれるのは喜ばしいことだ。

それが例えこの姿のためだとしても。

しかし、私、いや今はオレなのだ。

オレが男に好かれて喜ぶのは、王子がオレを好きだというのと同じ位おかしいだろう。

そう考えると、オレはライナーさんに何も言えなかつた。

「そうと決まつたわけでもないのですから」

オレとライナーさんの落ち込みぶりを見て、アキラは呆れたよう  
にため息をついた。

その姿さえ美しく愛らしい。

ライナーさんもそう思つてゐるに違ひない。

だからアキラは誰からも疑われないのかも知れなかつた。

「あ・・・申し訳ないのですが、この後陛下が直々に礼を述べた  
いことにして、謁見の間までご案内させていただけますか?」

哀れなライナーさんのためというわけではない。

国王直々にそう言つのであれば、行くしかないではないか。

この国のこもろくに知らない身ではあるが、王の意味は分かつ  
てゐる。

「失礼がないといいんですが・・・」

「ファルキオ王子もいらっしゃいますので大丈夫ですよ。たぶん」  
オレたちに感情を曝け出してくれるようになつた代わりに、王子  
を信頼できなくなつたライナーさんがそこに居た。

銀色の髪に紫の瞳は王子との血の繋がりを感じさせぬ。しかし、その色彩以外は特に似ているとは思わない。そんな顔の女性だつた。

美人な王子の母親といつにはあまりに違ひ過ぎてゐる。というか父親なんじゃないかと思つた。

「アリーシャ・R・シルヴァンティアだ」

凛々しい。

かつこいい。

女王だとアキラが教えてくれていなければ、決して気が付くことはなかつただろう。

オレと女王どちらが女性らしいかと問われれば、間違いなくオレだ。

彼女が女性ならば、オレが女性でないはずがない。

王子とライナーさん、ほか国の兵たちがオレを女性と勘違いした理由が女王なのかも知れないと思う程、彼女は男性的だつた。

微笑みを浮かべる女王だが、その目つきは元来鋭く厳しいものだと推察できる。

だからこそ、その笑顔がまぶしいのだ。

まあ、一人が入室するときにちらつと見ただけなんだけれど。顔を上げていいのかも分からずライナーさんに言われた通り、跪いて頭を垂れていた。

「二人とも、顔を上げてくれないか？」

「キオから聞いている。愚息が大変迷惑をかけたようで申し訳ない」似ていないと思つたが、並んでいるのを見ると親子だな、と思つた。

笑顔、というか笑い方がそつくりだつた。

思ったよりも謁見の間といつのは広いのだが、玉座まで続く赤い

絨毯の上でもかなり近くまで連れて行かれた。

先導してくれたのがライナーさんなので、この位置で失礼ではないのだろうが、近すぎるのではないかと思う。

「いえ、偶然通りかかっただけでしたし……」

「それでも、二人が居なければオレの生はあそこで終わっていたかも知れない」

すぐにライナーさんが来たから、間に合っていたんじゃないのかと思わないでもないが、助けに入つたことは確かに否定もできない。

「どうか、女王陛下相手に何度も口をきこうとは思えない。

何か間違つたことを言えば殺されたりしそうで怖い。

「コードスの森でも驚かせてしまったし」

「何? 一度も世話をかけたのか?」

女王が王子を睨んでいるがそんなことは氣にもならないようで、

こちらを見下ろす王子の顔は笑っていた。

「探索の兵がアキラ殿をロザリーと間違え、シユリ殿がそのかどわ

かしの犯人だと思い込んで襲いかかつたのです」

「なんでそれを先に言わんか! ?」

普通の母親らしく、息子を叱りつけると頭をはたいていた。

それにはさすがの王子も頭を押さえ顔を顰めていたが。

「すまなかつた。我が国の兵が貴殿らに危害を加えておつたとは」

「少し追いかけられただけです。その際にはわたくしどもの方が王子にお助けいただきました」

「オレは君たちを追いかけで誤解を解いただけだよ。君たちなら、簡単に逃げられただろう?」

あの時はまだ魔法を使つていなかつたので簡単ではなかつたかも知れないが、逃げることは可能だつたろう。

王子が追つて来なければそうなつていたはずだ。

「そうと分かれば余計に何か礼をせねばなるまい」

「そのお言葉で十分でござります」

最早口をきくのは全てアキラに任せ、オレは女王の容姿を失礼にならない程度に見ていた。

が、しかし。

その視界の中で、王子がじつとこちらを見ているのだ。  
微笑みをたたえた貴公子の顔で、誰の目にも美しく賢い少女であるアキラではなく、先程から女王とアキラの会話を聞いているだけのオレを。

いきなり女王から視線を逸らすのも不自然かと思い、王子の視線には気づかないふりをして、今は女王の靴の飾りを興味深げに見ているフリをしている。

あの視線が気になつて、ただ眺めているだけになつてているのだが。女性だつた時にこんな風に熱のこもつた視線を向けられたことがないので何とも言えないが、とても同性に向ける目ではない気がする。

振り返つてライナーさんに助けをもとめたいが、女王の手前それが許されるのかも分からないのでただひたすらに気づかないふりを続けていた。

「そうだ。二人は魔導師だつたな。魔道書を用意させよう」  
アキラでも辞退しきれなかつた礼の品は魔道書2冊。  
第7章『ファイオレスト』と第8章『グレスガイア』。

「本当にもらつていいいんでしょうか？」

「国王からのご好意ですから。それに、市場にはほとんど出回らない貴重品ですし」

それは知つていた。

第6章以降は國のお抱え魔導師に回り、市場にはほとんど下りてこないのが現状だ。

「ペンを『ご用意いたしますね』

「ありがとうございます」

魔道書には署名して所有の証をたてなければならない。

質素なメイド服の女性がペンとインクを用意してくれたが、2冊

ともアキラに渡した。

「国王は多分お一人に一冊ずつの本をもつてお渡ししたと思うのですが・・・」

「ですよね。でもオレ、2冊とも持ってるんです・・・」

「・・・」

ライナーさんは呆れられたが、そんなこと女王の前で言えるわけがない。

「いえ、でも本当にありがたいので、陛下には言わないでくださいね」

「そりや言いませんけど・・・」こんなものよく持つてしましましたね

ライナーさんも魔導師だ。

王子の騎士だという話だが、オレが想像しているような剣と鎧とお馬さんの騎士ではなく、魔法で王子を守つてこらつしゃるらしさ。

「ええ、まあ」

「わたくしはまだ第1章しか持つておりませんし、とても嬉しいです」

心底嬉しそうなアキラに、ライナーさんはつられて笑っていた。魔法が使えるようになったアキラは、この世界に来てから本当に喜んでいた。

使える魔法が増えるのは、更に嬉しいことだらう。

「そういえば、お一人はどのような理由で王都へ？」

今まで聞かれなかつたから答えなかつたが、旅人の旅の理由というのは意外と聞かれないものなのかも知れない。

理由なんてないのが普通らしい。

アキラはとても旅に向いているようには見えないだらうから、気になるんじやないかと思ったのに、実際尋ねられることはあまりないのだ。

「どこか定住できるところを探してあります。要するに家と職探しです」

「いらっしゃりでもお探しになりますが?」

「いえ、自分たちで見て決めたいんです。それにお礼はもういだきましたし、そこまでしていただくと、なんだかそのために王子様を助けたみたいじゃないですか？」

ライナーさんと話すことに慣れてきてしまったオレは、ついうつかり言わなくともいいことを言つてしまつた。

これでは押し付けがましいと言つたようなものだ。

言つてから口をふさぐと、ライナーさんは嫌な顔もせずに笑つてくれたのでよかつたが。

「すみません。今の絶対陛下たちに言わないでくださいね」「分かつてますよ」

最初の印象に比べると、ライナーさんはかなり優しい人らしい。というか、今まで会つた人の中で一番話しやすい。

今は同性だが精神的には異性だし、本来ならば苦手な顔がいい人だ。

王子程きらびやかな美形ではないが、ライナーさんも洋画にだつて出でこないような美形男子だ。

「シユリは思つたことをすぐに口に出し過ぎですわ」アキラに向ける笑顔も爽やかでかつこいい。アキラに向けてる笑顔の話だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9847y/>

---

異世界の女神と少年とその幼馴染

2011年11月30日19時49分発行